

書学理論とは、書芸を適切に修得しまたは理解するための理論であると定義することができる。書学理論の研究には、書写文化史研究の一分野として、より正確な書写文化史理解のために裨益する役割が期待されるほか、芸術理論研究の一分野として、諸芸術に対する受容・理解のあり方を講究する意義が見出されよう。本稿は、中国の後漢後期より唐前期に至る書学理論を対象とし、中国文学・中国思想研究の方法を用い、文献史料に対して適切な検討を加え、多角的・多面的な考察を試みるものである。

序章では、書学理論の類別を示しつつ中古における書学理論の発達を概観し、また先行研究を参照しつつ、本稿で扱う中古の書学理論に予め基礎的な史料批判を加える。

第一章「書体を詠う韻文ジャンル「勢」とその周辺」では、一つの書体を主題とし、「書体名+勢」あるいは「書体名+状」と題する、魏晉南朝に行われた韻文ジャンル「勢」を取りあげる。「勢」は、書体の由来・意義を述べる述義部と、書体の形状を述べる述状部の二つの部分に大きく分けられ、述義部が形式的にも内容的にも整って分かりやすいのに対し、述状部は変化に富み難解である。述状部の特徴として、他の事物に喩える比況と、オノマトペによる形容が指摘できる。

後漢後期・趙壹「非草書」の記述から、書体の意義を讃える「讚」の存在と、当時すでに書体の形状を自然物に結びつけたり、オノマトペによって形容する言説が流行していたことが窺え、これを「勢」の胎動とみることができる。また、西晉までに作られた「勢」には、遠近の対比によって書体の形状を述べる定型句が用いられる。この定型句は、魏末晉初の詠物賦に多用されたものであり、「勢」においては総括、転換という特別な機能を果たす。またこのことから、「勢」の成立時期が従来考えられてきた漢代ではなく魏から西晉の間であることが示される。「勢」は、書体を題材に新たな文学を創作しようという欲求と、書体の美点を文学の力を借りて写しとろうという欲求とが交わるところに生れたといえる。

劉宋以降は、「勢」の作品がほとんど作られなくなり、同時に散文による書論が成長してくる。散文書論は、概ね多様な個性を列挙するものであり、美点を書体ごとに集約する「勢」とは性質を異にする。一方、多様な個性を価値の体系として整理しようとした後発の散文書論である梁・庾肩吾『書品』、初唐・孫過庭『書譜』には、書の価値を一点に集約しようという「勢」と共通する意図があり、そこには「勢」に類似した様式の駢文が見られる。

「勢」は、従来他の散文書論と同列に扱われてきたが、散文書論が概ね書の価値を人間に理解可能な範疇においてコントロールしようとする論であるのに対し、「勢」は意図的に書の価値を読み手から遠ざけ、手の届かない高みに上せようとする文学作品である。

第二章「初唐以前の書訣について」では、『十二意』『筆陣図』『筆勢論』の三系統の書訣が初唐より以前に確かに存在したことを検証し、これらに対する分析を通して書訣の特質を明らかにする。

初唐以前の書訣は、必ず作者として書人の名を題する。その理由は、法書を起点として書訣が生み出されたことにある。初唐以前の法書は鑑賞と学習両面の起点として機能し、書訣も最初は法書の性質を有するが、のちに法書の部分はテキスト化され、無名の雑多な

言説を吸収してゆくという過程が想定できる。書訣と法書の関係から、法書から書訣へ、図像からテキストへ、鑑賞から学習へ、対象から手段へという書訣の歩んだおおまかな道筋が示される。また初唐以前の書訣には、いくつかの条目を列挙するという共通の特徴がある。これは秘訣としての完結性と加筆を拒む同一性を主張するものである。

書訣とは書法の極意を説く著作であるが、初唐以前の書訣の主要な内容を占めるのは用筆論と執筆論である。本来用筆論は法書の形式を、執筆論は図絵の形式を伴って書訣としての機能を果たしていたと考えられるが、後にはそれらがテキスト化されてゆく。しかしながら、いつの世にも図像によって書法の極意を伝えるという発想が新しい書訣を生み出す原動力として働いていたといえる。また、書訣の秘匿性を保障する方法に秘伝・口伝がある。書訣と画訣に共通して見られる要目と解釈という構造は、本来解釈をテキスト化せず口伝とすることで秘匿性を保障するものであったと考えられる。このような方式は典籍における本文と注釈の関係および注釈の本文化という現象にも類似する。

初唐以前では、法書『千字文』や書論『書譜』にそれぞれ書訣に類似した性質が窺え、そこから書訣と法書・書論との距離を見てとることができる。以上の分析から、中古の知識人社会における技芸伝承のあり方を考察する手がかりを得ることができよう。

第三章「〈筆勢〉の生れるところ：魏晉より唐初に至る書論を中心に」では、文学論にも書画論にも用いられる〈筆勢〉の語を手がかりに、筆と〈勢〉の二要素に内包される問題を検討し、書論に見られるそれらの概念を理解することを目的とする。

〈勢〉は基層においては事物の形態を意味し、またある形態によって何らかの効力が生ずるという構造をも意味する。書論においては、〈勢〉は書かれた字の形態ばかりでなく内的力感をも意味し、これは〈骨〉や〈力〉と通ずる。点画が質量のある〈体〉として存在するならば、そこには重力が発生し、この重力により〈勢〉の表す内的力感が生れる。

筆は文学論において作者の存在を示す効果的な形象である。書論においては、書かれた字を〈筆跡〉と捉え、そこから〈筆力〉を見てとろうとする考え方が窺え、筆の形象によって鑑賞の視点を作品から作者へ移すことが可能になる。書論史の流れを俯瞰すると、作品内部にのみとどまる観察に満足しない南朝人は、まず書作品に備わる美点を作者の個性に置きかえはじめ、また王献之の書にその父王羲之と異なる美点を認める作業を進めるうちに、〈筆力〉や〈筆勢〉によって表される内的力感の所在を筆と作者の手指が接するその場所に求めることになった。さらに彼らは二王書法を再構成し伝承する必要から、形骸にすぎない字形ではなく、点画の内部に存在する本質を追究しはじめ、その一つの解答として、筆を筆法と、〈勢〉を筆の動いた軌跡と捉えるに至った。かくして〈筆勢〉や〈筆力〉は究極的には円滑急速な筆の動き、すなわち動的力感と理解されるのである。

書訣においては、〈勢〉は戦陣を意味する〈陣〉に近く、それゆえ〈筆勢〉はすぐれた点画を書くうえで最も効果的な筆法を意味する。書訣における筆法論は兵法の秘伝書にも似た性質を有し、上記の書論とは違った発展を遂げている。このように、〈筆勢〉は意味の通時的変化ばかりでなく、その層としての重なりをも示している。

第四章「魏晉南朝の文論・書論にみる風格論と技法論」では、後漢後期～魏晉の人物評論、魏晉南朝の文論・書論を手がかりに、芸術理論における風格論と技法論の問題を検討

する。

後漢後期から魏晉にかけて、人物評論の営みが盛んになり、そのなかで〈風〉〈韻〉〈清〉等の語を用い、外形の超克と技術の否認を特徴とする風格論が発達した。魏晉南朝の文論は、人物評論から〈風〉〈清〉を継承したが、〈韻〉には風格を含意させず、声律という技術にその意味を固定せしめた。

魏晉南朝の書論においては、〈法〉〈規矩〉〈字形〉〈工（功）夫〉等の語により示される字形と、〈勢〉〈用筆〉〈自然〉〈天然〉等の語により示される筆勢との対立が認められる。つまり字形は技術論を代表し外形の再現を求め、筆勢は風格論として外形の超克と技術の否認を含意するのだが、書論はこのいずれかを選択するのではなく、両者を両立可能な美点として提示している。

文学にも書にも、さまざまなスタイルがあるが、文体・書体を類別する見方にも、風格と技術に対する見方が影響している部分がある。文体を文と筆に二分する文筆説を例にとれば、文には一定の規格があり、これにより筆勢の発露が抑制されているとみることができ、規格の無い文学が筆と呼称されることの説明にもなる。また書体を篆隸と草隸に二分するならば、筆勢は草隸にのみ具わる。さらに銘石書・章程書・行狎書に三分する説をふまえば、書写の目的に応じて規格の有無と筆勢の有無に配慮していることが分かる。

中古に詩を抄写した法書が存在しないことは重要であり、詩の声律と筆勢が両立しえないことを示している。またこのことから、文論における審美の焦点は風格から声律ないし筆勢に展開したことが窺える。さらに書論における審美の焦点は筆勢から筆法へ展開し、文論における声律とともに技法論に帰着した。中古において文学や書は士人によって担われたため、必ず風格論を起点として技法論を展開したのであり、また当時の士人たちは風格を獲得できる手段として技法を求め、そのことが風格論から技法論への展開を促したといえよう。

第五章「張懷瓘『書断』の史料利用と通俗書論」では、唐代を代表する書論家である張懷瓘の代表作『書断』の論述の特質をその史料利用の側面から考察するとともに、その後世における受容のあり方に論及する。

『書断』は、張懷瓘の出仕以前唯一の著作であり、内府に蔵される法書のような一級の実物史料を用いることができなかつたかわりに、多様な文献史料を駆使して独自の書体論・書人論を展開する。それゆえ、『書断』を理解するためにはその史料利用の態度を明らかにすることが肝要である。

『書断』の史料利用はおおよそ次のような体例に沿っていると認められる。①史書等にも見え広く共有され公認されている情報については出典を明示しない。②該当史料の著者独自の知見を具えた記事は、著者名を明示して引用する。③俗伝の類については出典を勘案し、公認性の高い記事のみ概ね出典を明示せず利用する（この場合は①に準ずる）。④通俗性の強い筆法伝授等の著作（通俗書論）についてはほぼ黙殺の態度を取る。

こうした著述態度は、雅を求め俗を避ける正統書学の志向と概括することができ、またこのような態度から、歴代の書論を学問的に信頼に足る正統書論と、学問的成果と認めるに足りない通俗書論とに弁別する視点が得られる。このような視点は、正統書論が蓄積するとともに通俗書論も社会に浸透しつつあった初唐のころから現れてくるもので、張懷瓘

はそれをより明確に提示したといえる。

しかし『書断』の記述には数少ないもののこの志向に反し、実は通俗書論を利用して可能性のあるものが認められる。この場合出典は明示されず、その通俗性ゆえに明示を憚ったものと考えられる。さらに、後代の『太平広記』には『書断』が多くの通俗書論とともに引用されており、『書断』と通俗書論との親和性を見てとることもできる。このような『書断』の受容史からは、『書断』以後正統書論と通俗書論との間の垣根が低くなってゆく書論史の展開を窺い知ることができる。

第六章「張懷瓘『書断』の書体論」では、『書断』において書体論が果たした役割について議論する。

『書断』において張懷瓘は、歴代の書人を神・妙・能の三品に品第し、その方法は梁・庾肩吾『書品』、唐・李嗣真『書後品』を継承しているが、張懷瓘はさらに正確な評価を確立するために、各書人を書体によって品第しわけるという新しい要素を加えた。張懷瓘はこの新しい要素を明確にするために、十の書体の沿革と特質を論述している。本章の論は、この十体が張懷瓘によっていかに選択され整理され、その独自の書体論がその書法批評においてどのような効果を発揮しているかを明らかにするものである。

『書断』の十体は篆隸と草隸の二類に大きく分けられ、古文・大篆・籀文・小篆・八分・飛白が篆隸に属し、隸書・章草・行書・草書が草隸に属する。さらに本章では、質と文、古と今、静と動という対立概念を利用して、篆隸・草隸それぞれの沿革に対する張懷瓘の捉え方を分析する。篆隸は質から文へ、古から今へ変化するとともに静から動へ変化するが、草隸は動と一体となる質・古から出発して、王羲之によって完成されるまでにほかの様々な美点を備えてゆく。概して張懷瓘の書体論は篆隸の分析においてはよく機能するが、書人により多種多様である草隸の美点をすべて説明することはできない。これは古来蓄積されてきた草隸の書人に対する見方を張懷瓘当時の書体観によって説明しようとしたためであり、ここに張懷瓘の書体論の限界があるといえる。

このように、『書断』の書体論を書人論のためのしかけと捉えることにより、従来注意されなかった著作全体の構造と意図が明らかになった。

終章では、研究史における本稿の位置づけを検討し、論文全体を総括する。